

第1回ミツバチの 童話・絵本コンクール 開催にあたって

山田 英生

「幼い頃、ミツバチや自然から学んだ温かな『こころ』を、現代の子どもたちに伝えたい」そんな願いを込め、山田養蜂場では、99年、「第1回ミツバチの童話・絵本コンクール」を開催することとなった。

3月23日のコンクールの募集告知以来、6月30日の締め切りまでに寄せられた作品は総数4,224編。なかには、遠くアメリカ、ニュージーランド、シンガポール、ドイツ、イギリス、中国、ハンガリーといった海外からの応募もあり、我々の呼びかけに対して、想像をはるかに超える実に多くの作品が寄せられた。

そこで今回はなぜ我々が、「ミツバチの童話・絵本コンクール」を企画することになったのか、そして、当社に寄せられた作品について、以下に報告したい。

子どもたちの心を育む 農業を基盤とするコミュニティ

現在、日本全国で10万人を超える子供たちが学校への不適応症候群として数えられている。そこには不登校から学級崩壊まで、さまざまな問題が内包されている。その原因は、学歴偏重の風潮や経済優先の社会など、大人たちが作り出した価値観にあると考えられ、そのひずみが子どもたちに確実に暗い影を落としている。

当社が、ミツバチをテーマとした「童話・絵本コンクール」の開催を決定するに至ったのは、現代の子供たちが置かれているこうした社会環境に心を痛めたからにはほかならない。

養蜂という農業を原点とする山田養蜂場で

は、農業社会において育てられる『こころ』を何よりも大切にしたいと考えているからだ。

古来より、農業者は、自らが育てた物が食として、人の身体と命を支えているということを実感して農産物を作ってきた。自分たちが作ったものは単なる『モノ』ではなく、愛情であり、思いやりであり、『こころ』そのものである。しかも自然との共生によって成り立つ農業においては自然の恵みに感謝する謙虚さも育まれる。それが互いを思いやる温かな『こころ』となっており、農業社会特有のコミュニティとなっていたのである。そして、こうしたコミュニティでは、地域社会の人々が温かな目で子供たちの人間性を育ててきた。子供たちを社会が育てるという仕組みが自然と成立していったのだ。つまりは自然との関わりの中で、『共生』の心も育まれていったのである。

ところが、近代においては、経済社会の発展の過程のなかで、こうしたライフスタイルが急激に変化してきた。農業という共同社会によって子供たちを育てるという教育の場が失われ、自然と触れ合う機会も極端に少なくなっている。その結果、『心の温かさ』や『人間同士のつながり』など、大切なものが忘れられつつあるのではないかと思う。

養蜂業は農業の中でも自然をまったく壊すことなく営むことのできる仕事である。だからこそミツバチや自然を通して教えられた、そうした温かな『こころ』を、地域社会とともに、子どもたちに伝えていくことは私たち養蜂家にと



図1 国内はもとより、遠くアメリカ、ドイツ、シンガポールからも寄せられた作品たち(全4,224編)



図2 審査員の先生方と交え、
受賞者の方々と記念撮影

っての重要な使命にほかならない。

本を通して人生の 喜びや悲しみを知る

では、この『こころ』をどのようにして子どもたちに伝えるか。

その方法を模索していたときに出会ったのが、98年9月21日、インドのニューデリーで開催された国際児童図書評議会の第26回世界大会の新聞記事だった。この大会において、美智子皇后様がビデオを通じて基調講演を行われたのだが、その内容は皇后様が子供の頃に読まれた本の思い出についてだった。

そのなかに新見南吉氏の「でんでん虫のかなしみ」という話が紹介されていた。これは、ある日突然、自分が背中に背負っている殻の中に悲しみがいっぱい詰まっているということに気がついたでんでん虫の話である。

そのでんでん虫は、友人を訪ね、「自分はもう生きて行けないかもしれない」と自分の背負っている不幸を話す。すると友達のでんでん虫は、「それはあなただけではなく、私の背中の殻にも、悲しみはいっぱい詰まっているんだよ」と応える。小さなでんでん虫は、別の友達、また別の友達と訪ねていき、同じことを話すのだが、どの友達からも返ってくる応えは同じだった。そして、でんでん虫はようやく気がつく。「誰もが悲しみを背負っているんだ」ということを。「自分が背負っている悲しみをこらえて

いかなければならない」ということを。

人生の中で自分の殻の中に悲しみが多いということは、それだけ他人の悲しみや痛みがわかるということなのかもしれない。

このように本を通して人生の喜びや悲しみを知ることは、その人の人生に厚みを加え、他者への思いを深めることができることなのではないか。そして、これからの新しい時代を担っていく子どもたちに、童話や絵本を通じてメッセージを送ることができれば、と考えたのである。そしてこれをコンクールの形態にしたのは、より多くの方に思いを共有してもらいたいという思いを抱いたからにほかならない。今回の「ミツバチ童話・絵本コンクール」は、そんな私たちの想いがカタチになったものだ。

チャーミングな応募作品 ありがとうございます

冒頭で紹介したように、第1回ミツバチの童話・絵本コンクールには、4,224編もの素晴らしい作品が寄せられた。

立体感のあるカラフルなイラストで最優秀賞を受賞した絵本『と・も・だ・ち』（東京都武蔵野市 斎藤好和）や、シンプルな色使いとホワイトスペースをうまく使った優秀賞の絵本『Honey Bee…Dee』（東京都世田谷区 石田有二）、少女とおばあさんとミツバチの心温まるふれあいを描いた童話『ミツバチがやってきた』（東京都町田市 古野孝子）など、新たなミ



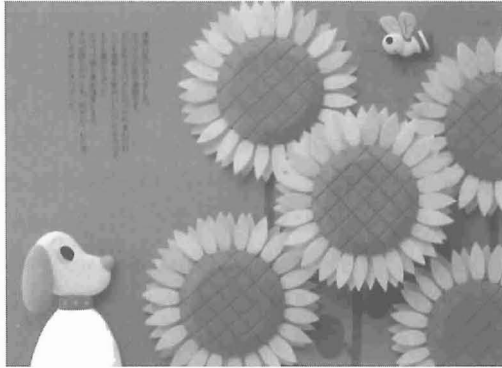
図3 最優秀賞の斎藤氏に表彰状を授与
(作品名『と・も・だ・ち』)

「ミツバチの童話・絵本コンクール」入賞者

最優秀賞 1名

『と・も・だ・ち』(絵本)

東京都 斉藤 好和様



あらすじ

新米働きバチのビビ。巣の中の仕事を終え、いよいよミツや花粉集めに出発することになりました。ヒキガエル、カマキリ、クモの巣など外には危険がいっぱい。ビビはなんとクモの巣に引っかかってしまいます。食べられる！と思ったら、犬のタロが助けてくれました。その時からビビとタロはともだち。それぞれの暮らしを話してますます仲良しになる二人ですが、冬が近づくにつれ元気のなくなるビビ。ミツバチの寿命は半年なのです。

現れなくなったビビ。でもタロは、春に自分の小屋にやってくるミツバチに話しかけます。いつかビビに会えると信じて…。

優秀賞 2名

『Honey Bee……Dee』(絵本)

東京都 石田 有二様

あらすじ

ミツバチ・ディーは、6人のお姉さんと5人のお兄さんのいる12人きょうだい。英語の1月から12月までがそれぞれの名前です。森の中でホットケーキ屋さんをするディーの家のために、きょうだいみんなはよく働きます。おうちよこちよいのディーですが、みんなの元気のもとです。くまんバチさんや足ながバチさんのホットケーキサービスに負けじと、ドーナッツ型のホットケーキサービスを始めるディーたち。たちまち人気が出て…。

『ミツバチがやって来た！』(童話)

東京都 古野 孝子様

あらすじ

小さな村。土も悪くなかなか作物の育たない村に、一台のオンボロ車に乗って、歯のないおばあさんと小さな女の子がやって来ます。草にうもれたぼうぼう屋敷に住みついた2人は、おいしいパンケーキを焼き、たっぷりハチミツをかけて皆にふるまいます。村人はすっかり2人と仲良し。栄養満点のミツバチジュースもおいしくて村人はぜひミツバチを呼びたいと考えます。おばあさんはミツバチに手紙を書き、村人はレンゲの種をまいて花を育て準備を整えて待ちます。ミツバチは大群でやって来て、たっぷりのミツを村人にプレゼントしました。

佳作賞 7名

『ふしぎなレストラン』(童話)

東京都/羽田 幸男様

『変身ミツバチ物語』(童話)

兵庫県/持田 槇子様

『ひとりぼっちのミツバチ』(童話)

愛知県/後藤みわこ様

『はちみつくさ〜い』(絵本)

岡山県/大谷 基栄子様

『魔女のミツバチ作戦』(絵本)

埼玉県/北野 玲様

『ぶんぶんぶん』(絵本)

神奈川県/小泉 貴子様

『ミツバチ プルちゃん』(絵本)

栃木県/中島 勇弥様

その他、努力賞として『蜂丸の大大大冒険』『けん太印のハチミツ』『ハニーグランパ』等、いくつかの作品を選定しました。

審査員の先生方

木村尚三郎氏(東京大学名誉教授)、松香光夫氏(玉川大学ミツバチ科学研究所施設教授)、明石要一氏(千葉大学教授)、向山洋一氏(教育技術法則化運動代表)、横田稔氏(画家)、吉田たろう氏(グラフィック・デザイナー)、杉本広之氏(薬学博士)、高城修三氏(作家) 順不同



図4 表彰式当日には作品が閲覧できる
展示コーナーも設けられた



図5 表彰式では審査員の木村尚三郎教授、
向山先生の基調講演も行われた

ツバチ文化の芽生えを感じさせるさまざまな作品が寄せられた。

10月2日には岡山市内のホテルにおいて、入賞者の表彰も行なった。表彰式に先立ち審査員の教育技術法則化運動代表・向山洋一氏「子供たちの生きる力を育む教育～学校崩壊からの生還～」と東京大学名誉教授の木村尚三郎先生「三つの愛に生きる～人・自然・歴史～」の基調講演会が行なわれた。向山氏からは、「みつばち文化の出発にふさわしい作品ばかりだった。特別賞の上海市実験学校の小学生の作品は、その創造性といい作品の完成度といい、日本の小学生の作品を圧倒していた。次年度、日本の教師の指導作品を期待したいものだ」という言葉をいただいた。また木村先生からは「幼児・児童の健全な育成に向けて後世に残る作品を創作していこう」という目的のもと行われた本コンクールだが、このようにたくさんの方々から夢のある作品をお送りいただき、大変感銘を受けた。自然の恩恵に感謝する心を多くの方々と共有し、未来を担う次世代の子どもたちの育成

に、ともに力を注いでいきたい」との共感のお言葉をいただいた。

表彰式は約400名の列席を仰ぎ、終始和やかな雰囲気の中で進められた。表彰式の後、レセプションの席上では入賞作品の数々をスライドのスクリーン上で紹介。また別室では童話と絵本の作品展が開かれ、列席者の方々は素晴らしい作品の数々を一つ一つ熱心に観賞されていた。

私たちの呼びかけに対して、こんなにも多くの方が応えてくれたことを本当にうれしく思う。当社の原点であるミツバチをテーマとした今回の「ミツバチの童話・絵本コンクール」によって、「自然の大切さ」「命の尊さ」「他人を思いやる心」などが、子どもたちの心の中に芽生え、育ってくれることを心から願い、また回を重ねるごとに共感の輪がさらに広がっていくことを期待している。

(〒708-0393 岡山県苫田郡鏡野町市場 194

(株) 山田養蜂場)